

備陽史探訪

第56号

発行

 備陽史探訪の会
 福山市多治米町5-19-8
 TEL(0849)53-6157

中世を読む会の試み

中世村落の構造と領主制へのアプローチ

ー西遷地頭小早川氏の場合ー

出内 博都

班田制にはじまる土地国有制、権門寺社による荘園制、こうした唯一の生産手段である土地へのしがらみは、そう簡単に切りかえられるものではないだろう。こうした中で、関東の田舎土豪として育ち、たまたま幕府という錦の御旗をバックにしたとは云え田舎侍が、西も東もわからない西国、特に京都、奈良の大寺社によって権威のみしか後楯のない貴族支配のしがらみの中へ入ってきた西遷地頭には、およそ実力が物を云う関東の世界で育った倫理では処しきれない厚い壁があったのであろうと思える。こうした中で数百年の雌伏の中から毛利氏を筆頭に多くの国人士豪（領主）が育った西国の中世の歴史は、人と人、人と土地、支配と被支配などの人間社会の縮図であると思う。頼朝挙兵の初期から側近

に仕えた土肥実平、一時は中国筋の総追捕使（守護）として権力を振った彼も、平氏残党勢力、公家に連る西国では必ずしも志を得ず幾度か挫折している。こうした祖先をもつ小早川氏が、沼田荘および都宇竹原荘で戦国大名にまで成長する過程は、多くの先学の研究によって種々解明されているが、後世の領主という形では想像もつかない「地頭職」という形の領有、特に「職」という領有内容は今日では最も理解しにくい権益内容である。これを基に領主に成長する過程のいくつかのプロセスを残された古文書をたよりに辿ってみたいと思います。

検討課題としては、鎌倉期地頭領主制の基礎であった惣領制が室町期にどう変遷するか、室町、戦国期には領主制を保護する家臣団がどのよ

うに構成されるか、などである。鎌倉初期の小早川氏は一族を荘内各村に分置しつゝ、これを惣領が統轄しつゝ、「職」の支配からしだいに「下地」支配をめざした。

鎌倉中期には領家を庄倒し、同じく庶子は各自の所領の独立の知行者としてあらわれてくるが、これこそ惣領制と呼ぶべきもので、土地知行の主体が個々の庶子にあったが、大枠として惣領制の中にあった。南北朝内乱期になると小早川本宗、椋梨、浦、上山、舟木等は惣領相統を行ないその後各家の庶子たちは各家督の家臣化されていき、各家は対等な関係で同盟の結合を結んだとされる。こうした動きについての諸説はいろいろあり、又各地頭によっても異なるが、多くの場合、室町期の小早川氏は沼田本宗から出た庶子の各家督が独立した所領知行を行ない、各々より出る庶子を家臣化しその上で一揆的結合を結んだということである。

一、小早川氏の安芸定着

相模土肥郷を本貫とする土肥実平が、元暦元（一一八四）年備前、備中、備後の惣追捕使に任ぜられ、実平とその子遠平は主として備後で荘園支配していたが公家側の反撃にあっている。しかし遠平が安芸国の安

直、本庄、新荘を勲功の賞として獲得し、在地基礎がつくられた。ところが建保元（一一二一）年の和田合戦で維平とその子が和田方に加わり誅せられ、第一次の危期が到来した。乱後、平賀氏から養子景平を迎え、安芸に本拠を移し、小早川と改名したのはこの乱が契機と思える。

景平の子茂平は和田の乱以前に景平が父、遠平から譲り得ていた沼田荘を相伝すると共に、都宇竹原荘も持っている。

二、沼田小早川氏の領主制

沼田小早川氏は椋梨氏、竹原小早川氏の二大庶子家を出したあと、おもに沼田本荘（本家蓮華王院）で領主制を形成している。その所領は一代一代の変動が大きく、ほぼ一貫して伝えたと思えるのは沼田荘本郷、乃美郷、伊予国越智郡内大島、七条大宮箒屋地四半町、東山霊山内平松敷地のみであるから、領主制の拠点となるのは沼田荘本郷を中心とする部分だけであった事がわかる。他の所領の変動の激しいのは庶子に分割されたためであると考えられる。

（朝平から扶平まで八代の間に何らかの職、権益、領有権をもっていた所領は延べ五〇ヶ所に及ぶ（田端泰子著書）こうした状況から鎌倉末の

分割相続からこの庶子家の独立とい
うのが一般的見解であったようであ
る。しかし室町期小早川氏の事態は
それとは逆の方向に移行しつつあっ
た。

沼田荘本郷について 応永二十一

(一四一四)年沼田本郷は則平から
ら持平に「沼田庄本郷地頭職惣公
文職検断事除庶子」として与えられ
たが、康正元(一四五五)年には瀧
平より又龜丸(敬平)に「沼田庄惣
領職悉」として譲与されさらに敬平
より扶平へは延徳三(一四九一)年
「沼田庄惣領職悉并寺領社領」として
与えられている。これを見ると十五
世紀中頃の変化の大きさがわかる。
これはいかなる要因によるものだろ
うか、それに関連するものとして沼
田荘内舟木郷が茂平の一子経平(舟
木を号す)へ渡され建武三(一一三三
六)年経平の孫小早川中務入道道円
(貞茂)は「沼田荘内舟木郷内地頭
職」を安堵されている。ところが文
和三(一一三五四)年幕府より舟木郷
二分方が沼田小早川貞平に預けられ
ている。

除庶子」にあたると考えてよい。と
すると永享ごろまで庶子分所領は明
確に惣領家分と区別されていたこと
がわかる。この惣領家分は敬平以後
独自の形で現れず、ただ「惣領職悉」
という表現がみられるだけである。

同じことは沼田荘内安直本郷につい
てもいえることで敬平、扶平時代に
は「沼田庄惣領職悉」に集約されて
いる。結論的にいうと、十五世紀後
半より十六世紀前半までに沼田小早
川家が沼田荘惣領職を所有し、個々
の庶子の支配を含みこむかたちで一
括して沼田小早川氏が支配するとい
う体制ができあがっており、地頭一
国人一領主一戦国大名への質的転換
がそれぞれの地域性によって進みつ
つあったことを示している。この時
代の惣領職の内容の質的变化(惣領
職に対する幕府の介入権の低下)や
惣領家の荘園領家に対する関係の変
化(庶子分も一括して惣領家が納め
る)次に国人衆の力と守護(武田一
今川一渋川一山名)との力関係の変
化である。特に幕府の奉公衆として
の小早川の地位を考えねばならない。
更に農民の存在形態の変化である。
農民層の著しい成長が庶子家を素
通りして惣領家に結びつく例も考え
られるのではないだろうか。(特に

新田、新浜の開発について)更に庶
子側からの求心化要求があげられる。
室町初期庶子家の間に一揆的結合が
存在するが、応仁、文明以後、惣領
家への求心化が進行している。

見が出ていたようです。
今でも、各地に家系図を大切に保
存されている家があります。史料の
価値は別として、家に関わる由緒を
示すものとしての価値は、今日では
仏壇の位牌程度のそれしかありませ
んし、また必要もありません。近世
においては、家の由緒を示す大切な
ものとして、大事にされ大いに利用
されて来ました。村落も例外に漏れ
ず、特に村役人層の間では家系図の
有無で、立場を大きく左右してい
たようです。

その例として応永三十(一四二二)
年庶子小泉氏が代々知行していた伊
予国越智大島の半分を沼田小早川氏
に譲りかわりに惣領家(特平)の扶持
に与えることを契約している。

芸備地方に広く分布している福島
氏のなかで、神石郡三和町父木野に
福島正則の後裔と伝わる家がありま
す。正則と言え、賤ヶ獄の一番槍
で有名な武人で、関ヶ原の合戦の功
により芸備四九万石の大名として、
慶長五年(一六〇〇年)一〇月に芸
備へ移封されその後、広島城無断修
築を咎められ改易となった元和五年
(一六一九年)までの一九年間当地
に足跡を残しています。

(附記)大まかに述べましたがこ
した数世紀の動きを現物の史料(小
早川家文書)で立証したいのが本音
です。「中世を読む会」をこうした
史料の読解に切りかえていきたいと
思いますので多数ご参加下さい。文
書は活字本なのでどなたでも読めま
す。資料作成の関係上五月末日まで
に申し込んで下さい。(※今後例会を
毎月第三火曜日に変更します)

父木野福島氏について

事務局(田口方) 五三一六一五七
(出内方) 五五一〇五三五

父木野福島氏について

杉原 道彦

皇太子御婚約に関する報導の中で、
家系図により両家の紹介が大々的に
行われたことで、一部には差別を助
長するものとして自粛をもとめる意

福島の系譜については、広島県史
に紹介されている南郷氏旧蔵の福島
家系譜や備後史談に掲載されている
福島家家老尾関氏の末裔某家蔵の家
譜などで周知の通りですが、諸説入
りまじり判然としていません。

今回、新たに江戸期を通じて父木野

の村役人を勤めた屋号原谷(わんだに) 福島氏、榎(えのき) 福島氏に

伝わる系図を紹介することで、識者の判断を仰ぎたいと思います。

ただ、一般に言われているように系図のもつ信頼性からして多くの疑問

がのこりませんが……。

系図によると正則の三男左兵衛大夫

正森の長子、福島右近助兼平を父とし

六右衛門兼勝、市右衛門兼重、久

兵衛兼正の三兄弟が元和三年(一六

一七年)一〇月下旬備後に下り、神

石郡父木野村の宗兼原谷に居住した

のが始まりとしている。三兄弟のうち

、次男市右衛門は榎福島として、

また三男久兵衛は声品郡金丸の成瀧

に住まい日下氏を称えています。

六右衛門から数えて四代目四郎右衛

門兼則の寛文三年(一六六二年)三月

二十九日卒までの記載で、系図は終わ

っています。

この兼則の弟、源左衛門信則は正保

二年(一六四五年)分家し、屋号宗

兼峠と称し清瀧神社の頭屋を始めた

と記しているが、これについては明

暦三年(一六五七年)の神社関係文

書から後の神主福島伊予守家である

ことが、確認できる。

また、享保二年(一七一七年)に中

津藩の飛地領になった前後から、父

木野の庄屋や組頭を原谷福島、榎福

島が勤めるようになったことを考え

れば、この頃に系図が作成されたも

のと思われれます。

一方、系図の始めを見ると、清和天

皇にはじまる清和源氏で嘉吉二年

(一四四二年)に愛知郡中村に住居

した山名歳吉光則が、旧里福島の地

名を姓にしたのが福島氏のはじまり

としています。旧里福島は、摂津国

西成郡福島ノ庄と思われます。七代

目が正則となり、父新右衛門道則の

とき「渡世ノタメ桶屋トナリ漸光陰

ヲ過ス」と記し、正則が桶屋の伴と

言う説は、この辺りに由来している

ものと思われれます。

正則については、「左衛門尉幼名市松

一八歳ノ時山崎合戦初テ羽柴筑前守

秀吉エ仕其ノ旗下ナリ其後柴田勝家

ト合戦ノ当時軍功有り、天正一三年

ヨリ二〇万石ノ知行被下清洲ニ居城

ス。賤ヶ嶽七本槍ノ内ニ後ハ西備三

原ニ居城ス、行年六三歳ニテ卒ス紋

ハ巴ニウナヌキノ紋。」とし正則が一

時期、三原城にいたことを示してい

ます。

系図によれば、長男左衛門大夫正清、

次男市右衛門正之、三男正森とし、

正清は「幼名市四郎備後神辺ニ居城

ス、知行五万石之三歳時短氣ニ依

テ父正則手討ニス紋ハダキメウガ、

元和元年(一六一五年)五月七日落

城ス。」

正之は「知行一〇万石尾張ニ居城ス、

徳川ノ旗下井伊掃部為討死ス元和元

年三月落城ス。」

正森は「知行五万石作盗山居城ス幼

名市左衛門四一歳ノ時慶長一九年

(一六一四年)ニ落城ス、後真島郡

草加部村へ引コモル、紋ハ三階ノ松

以上、慶長一九年の大坂冬の陣、元

和元年の大坂夏の陣で大坂城が陥落

した五月八日から判断してこの三兄

弟を見ると、いづれも大坂の陣に豊

臣方となっていたことが系図から読

み取ることができます。

この系図以外には、正則に関する史

料は父木野福島氏にありません。た

だ宗兼に現在残っている江戸初期に

建立されたと思われる宝篋印塔、清

龍神社に名刀を奉納したことが伝わ

っているなど名残をとどめています。

系図を拝見するにも、多少の苦勞を

必要とすることを考えれば、誤りを

指摘することなど思うのは止めにし

ます。 以上

「万能倉の地神さん」について

井上 新一

農村の辻や道端に、「地神」と彫

られた自然石の「地神さん」が祀ら

れているものですが、駅家町万能倉

の吉野川の堤防には、土地の人が

「地神さん」として祀っている神様

があるが、その神様の神体の石造物

には「地神」では無く、「社稷神」

という難しい字が、行草体で彫り込

まれている。大抵の人には読めない

字である。地神社としては非常に珍

しいのではないかと思う。

難しい言葉なので、広辞苑を引い

て見ると、「しゃしよく「社稷」昔

の中国で、建国のとき、天子、諸候

が壇を設けて祭った土地の神(社)

と五穀の神(稷)。

二、国家、朝廷。」

とある。

非常に意味深長な大きな神の名に

したものと、昔の人の学殖の深さ

に感心させられたものである。

二、の国家、朝廷とは大きな意味

のある言葉だが、農耕民族の立場か

ら考えると、土地そのものが、国家

であったのであろう。

試みに「地神」も引いて見た、

〔「ちじん」地神〕（ヂジンとも）地の神。くにつかみ。地祇。〕

と説明してある。地神、地祇、地の神、くにつかみ、はすべて古くからこの国土にあって、国土を守護することが即ち、農耕を守ることであったのであろう。

日本の神々の系譜を考えると、アマテラスを頂点にタカマガハラから来た、いわゆる、天孫の神をアマツカミ（天神）と呼び、それに対し、古くから、この国土に居て、アマツカミに服属した神や、地神をクニツカミ（地祇）と区別して、天神は地祇より高級な神として、天神地祇の序列がつけられているようだ。

地祇である「地神さん」は天孫以前からこの国にあって、この国の民や、農耕を守って、尊敬を受けていた神である。

大正十四年に刊行された、芦品郡誌によると、万能倉の地神社の祭神を次ぎのように記載している。

天照大神。（アマテラスオオカミ）
大己貴命。（オオナムチノミコト）
（大國主神の別名）
少名彦名神。（スクナヒコナノカミ）
（大國主神と兄弟の契りを結び国作りをしたと言う神）

植山彦名命。山の神か、

倉稻魂命。（ウカノミタノミコト）豊字氣比売神（トヨウケヒメノカミ）（伊勢神宮の外宮の祭神の別名）この神から、天照大神が五穀の種を貰い、この国へ植えることにより、トヨアシワラミズホノクニとなったという。

大己貴命、少名彦名神は出雲神話の主人公で、地祇の代表格の神であるし、植山彦名命は、確定はできないが、倉稻魂命は天孫係では無いが、農業の総本山の神であるから、地神社の祭神にはふさわしいと考えられる。

地神社の祭神に天照大神がでてくるのが唐突とも思える。

元禄検地帳（一七〇〇年）、西備名区（一八〇四年）福山志料（一八〇九）にはこの神が、万能倉に祀られたことがでてこないから、その後

の創建だということが考えられる。万能倉の人で、教育者で、政治家でもあった、安村伝六氏（一八七八

—一九六六）がこの神の神号を揮毫をした人を「赤川先生」と書いておられる。安村氏が赤川先生と表現し

ておられるからには、安村氏からあまり遠くない時代の人の筆と云うことが考えられる、即ち明治四年の廃仏棄釈以降の建立ということが考え

られるが、それにしても随分学殖のある人であったと思われる。この赤川先生について会員の皆様方のご教示を戴けたら有り難いと思います。

祭典は従来春、秋に営まれていて、住民もたくさん参っていたが、最近

は四月の第三日曜に営んでいるが、参詣者は殆ど無くなって、神社総代だけが参加して営まれている。これは万能倉地区が、純農村では無くなり、農業が重要視されなくなった時代を反映しているのだと思われ

大和路探訪―その一

平田 恵彦

私は福山で育ちましたが、生まれ

たのは奈良県吉野郡です。ですから、奈良には親戚がたくさんあり、子供の頃はよく遊びに行きました。懐かしいの準急「びんご」や「はやとも」

などで大阪まで行き、環状線で天王寺、そこから阿部野橋まで歩き、近鉄特急「かもしか」で吉野、というのが夏休みの定番になっていました。

一番よく行った叔母の家は「吉野神宮」のすぐそばにあります。にもかかわらず、私は「吉野山」はもち

ろんのこと「吉野神宮」にさえ行ったことがありませんでした。まして、奈良の他の史跡など推して知るべしです。唯一の例外が、小学校の修学旅行で行った「東大寺」というので

すから、情け無い限りです。もともと、一般的な福山人としては、これが普通なのかも知れません。ところが、昨年十月二四日に行われた神谷先生の郷土史初級講座がきっかけとなって、奈良県桜井市三輪にある「大神神社（大和国一宮・三輪明神）」に興味を持つようになりました。周辺には、数多くの有名な遺跡・史跡もあります。

それではというわけで、安上がりの「青春切符18」を利用して、昨年暮れに日帰りで行って来ました。福山を四時五三分に発つと、三輪駅

に十一時前には着きます。まず、駅でレンタサイクルを借り、

すぐ近くにある「桜井市埋蔵文化財センター」へ行きました。展示が見たかったのですが、運悪く展示室は

休館（火曜日）でした。しかたがないのでパンフレットなどの資料だけ頂くことにしました。

その後、有名な「箸墓」に行きました。倭迹迹日百襲姫の墓だとされている巨大な前方後円古墳です。伝

説では「昼は人が造り、夜は神が造った」といいます。

しかし、丘陵を利用した古墳と違い、まったくの平地に盛り土をし、これだけの巨大な古墳を造るのにどれだけの労力と日数を要したのかをかんがえると、気が遠くなりました。「箸墓」からは「巻向山（弓月が獄）」と、それに連なる大神神社の神体山である秀麗な「三輪山」がよく見えます。

『万葉集』巻七の雑歌には、この二つの山を歌った歌が多くみえます。

(一〇八八)
あしひきの山河の瀬のなるなへに
弓月が獄に雲立ち渡る

(一〇九五)
三諸つく三輪山見れば
隠口の始瀬の松原おもほゆるかも

などですが、(一〇八八)のほうは人麻呂の代表作として有名ですね。さて、前方部に行って写真撮影をしよう(ちょっとくらい中に入ってもよいのでは)とそちらに回ると、村外れのお堂のような建物があり、中に誰かいるようです。

自転車を乗りつけると、かたわらに50ccのバイクがあり、前のかごに白いヘルメットが入っていました。よく見れば、なんとノ恐れ多くも畏

くも「宮」の御印。私のような不心得者を見張っているものであります。岡山の「彦五十狭芹彦命」の御陵

(中山茶臼山古墳)にはいなかったのに、やはり倭迹迹日百襲姫の方が格上ようです。しかたがないので、おとなしく正面から何枚か撮って引き上げることにしました。

箸墓からは「国津神社」「松原神社」「綱越神社」などの有名な摂社をまわり、大神神社へ向かいました。大鳥居を背にして進むと、桜井線屋が並び始め、広い駐車場があります。自転車をここに置きました。平日でしたが、参拝客は老若男女問わず、そこちこちにあります。

「三輪明神」の額がかかった「二の鳥居」からは、杉の長い参道が始まります。あたりは清浄な雰囲気につつまれ、身が引き締まるような気がします。参拝者のさくさくという足音だけが響いています。

いくつかの摂社を通り過ぎると、左手に「夫婦岩」があります。その先に階段があって、上にかかる大きな注連縄越しに拝殿が見え始めます。階段を登り切ると境内で、正面に拝殿、左に「勤番所」、右には「勅使殿」と「己の杉」があります。

拝殿は松皮葺切妻平入の主棟と千鳥唐破風大官造の向拝から成っています。主棟には「菊の紋章」が入っています。これは戦前とは違い、いまでは天皇を祀る神社以外でも、大きな神社ではごく普通です。

よく知られているように、大神神社には本殿がありません。三輪山自体が御神体であり、現在でも、山中は原則として禁足地になっています。それで、拝殿奥正面にある独特の「三ツ鳥居(三輪鳥居)」を通して神体山を拝するようになっていきます。

上古には、神祀りをする際には、神体山そのものを直接拝したり、山中の磐座、あるいは神籬を立てて、そこに神を迎える形式をとっていました。ですから、本殿がないのがむしろ普通で、大神神社は古い形式を残している数少ない神社なのです。拝殿と己の杉の前には供物台があって、大量の「タマゴ」と小瓶に入

った「清酒」が供えられています。これは祭神の大物主神が、蛇身(古事記の神婚譚、日本書紀の箸墓伝説)であることと、この神が醸造神として知られているためです。

供物が置ききれないと、神主さんがポリバケツを持って集めに来ます。タマゴはともかく、清酒はいつたい

どうするのでしょうか。まさか、もう一度売り直すことはないと思うのですが……。直会の風習通り、神主さんたちが毎日夜に一杯やるのでしょうか。中村副会長ならずとも気になるところでです。

そうするうち、特別の願い事をする人があるらしく、拝殿の上に数名の方が上がりました。しばらくすると、巫女舞が始まりました。お世辞抜きで美しい二人の巫女が、優雅に、そしてしなやかに舞います。雅楽もどこの神社のようにテープでこまかすことのない立派なものです。

拝殿前には様々な人がいます。千円札を賽銭箱に入れる中年夫婦、履物を脱ぎ、地面に額づいて何事か吹き続ける老婆、柏手を打ち、繰り返し深く頭を垂れる老紳士、神妙な面持ちで御籤を引いている女子大生。三輪山の神はいまも確かに生きています。

大神神社は、間違いなく、名実ともに第一級の神社です。

境内を右に抜けると、「平等寺」「金屋の石仏」へと続き、左へ抜けると「磐座神社」を経て「狭井神社」へと続きます。

狭井神社のすぐ手前には、三輪山への登り口があります。しかし、お

袂いを受けないと登れませんし、もちろんカメラは持参できません。さらに「それなりのものを納めること」と掲示してあって、いったいどれくらい包めばよいか見当もつきません。こういうのが一番困ります。早い話が、禁足地には登るな、ということでしょう。

狭井神社は「大神荒魂神」を祀っています。社殿の横には「藁井戸」があつて、霊泉として有名です。この水を求めて各地から集まつて来るのだそうです。

狭井神社から戻つて「久延彦神社」へ向かいます。途中、小高い丘があつて、公園になつています。ここからは、大和盆地がほぼ見渡せます。正面やや左手前に三輪の大鳥居があり、その向こうに、大和三山が左から「天香久山」「畝傍山」「耳成山」と並びます。さらに背後には、金剛・生駒山塊、そして右後方には「二上山」が見えます。

これらの山々に囲まれた、ほんの小さな盆地から、日本最初の統一政權が生まれ、「国のまほろば」と歌われたのです。

いまその遺構は、地中深く眠っています。夢のような気がします。久延彦神社は知恵の神「久延毘古

命」が祀つてあります。境内は合格祈願の絵馬だらけでした。

この神社を下つて、「若宮」に向かいました。「大直禰子命」が祀られています。

崇神天皇の御代に疫病がはやり、民が疲弊したとき、大物主神が天皇の夢枕に立ち「吾が兒、大田田根子をもつて吾を祀らしめば、たちどころに平ぎなむ」と告げたといひます。

若宮は、奈良時代には神仏習合して「大神寺」、さらに中世には「大御輪寺」と称され、三輪流神道の首唱により、多方面に大きな影響を与えました。

若宮のちようど前を、日本最古の道「山辺の道」が通つており、北に進めば、天理市の「石上神宮」から「赤坂比古神社」まで、南東に進めば、金屋から初瀬川を経て、磯城野、脇本まで続いています。いつの日か、歩いてこの道を辿つてみたいと思ひました。

帰りに、三輪駅の待合室でベンチに座ろうと、ふと横を見ると、三毛猫が寝ています。これ以上丸くはなれませんがよという感じで、ほとんど毛の生えたアンモナイトでした。

私は手が冷たかったので、わき腹から右手を突っ込んで、カイロ代わ

りにしたり、コチヨコチヨくすぐりしましたが、まるで無抵抗。ますます丸くなって、惰眠を貧るばかりです。ところがこの猫、キオスクのおぼさ

んのガサゴソ音と「ミイ、起きい」の一声で飛び起きます。おぼさんが出したのは、エビセンの袋で、どうやら大好物のようです。これをカウ

ンターに並べると、一個ずつくわえて下において食べます。ずいぶん行儀がよい猫だなあ、と思つてみると、さにあらず。おぼさんがホームに行くと、飛び上がった袋に顔を突っ込み、今度は売り物の「週刊女性」と「週刊現代」の上でひたすら食べま

くりまします。おぼさんが戻つて来たので、叱るかなあと思つて見ていると、しょうがないねという表情で黙認です。売り物より猫を大切にす、心温まるキオスクでした。

みなさんも大神神社に行く機会があれば、エビセンを持つて行つてやつてください。

この後、石上神社に行きましたが、別の機会に書くことにします。

甲奴町 宇賀八幡神社のこと

熊谷 操子

福塩線梶田駅より西へ徒歩三十分。旧奥道から少し北に位置する場所に宇賀八幡神社がある。

三十七代目の現宮司の信野友嗣氏とは、随分前から歴史や絵馬に関する話題を交換（御教示願う事の方が多い）し合つている。

「私の神社にも絵馬が少しありますよ」とお聞きしていたので、この度三回足を運んだ。

嵯峨野の竹林を想い出させるような竹林と、杉木立の中に、寛延三年

（一七五〇）建立の鳥居と一對の狛犬がある。右の狛犬には矢野村、山岡儀平とある。御調八幡の玉垣にも三十円の寄付があつたのを思い出し、福塩線敷設の陳情運動に参加した一人であることも思い出した。鳥居を

抜けると忽然と現れたという感じの建物が見える。表へ廻ると、それは間口五間ほどの拜殿（神楽殿）であつた。年末に氏子達が時間をかけて掃き清めたのであろう。神域は

落ち葉も殆んどなく、そのひんやりとした空気と相俟つて、神々しい気が漂つていた。三千二百坪といわれ

る境内地の真ん中に、ひとり佇つて
いると、その静けさにおのずと身の
ひきしまる思いがする。拝殿の真向
かに幣殿があり、その奥に堅魚木
を頂いた本殿が見える。

拝殿に二十点余りの絵馬を見つけ
た。武者絵はこの社寺のも似たり
寄つたりであるが、文久三年から昭
和七年までのものの中に、赤馬が描
かれたものは珍しい。日本一と謳わ
れている北野天満宮の絵馬堂にも、
赤馬は無かつたように記憶する。絵
馬の数は御調八幡や小童の須佐神社
ほどではないが、この周辺の神社で
は多い方だろう。正面の大絵馬二面
は、明治二十三年に近在の農民が伊
勢参宮を終えた時点で奉納したもの
で、そのくわしい文書が最近見つか
つたと信野先生は大変喜んでおられ
た。

それによると、その前夜、宮司と
共に神に無事帰還を祈る意味の小宴
を張り、酌み交わしたという。出発
して途中大阪から、無事大阪まで来
た旨のたよりを寄越し、参宮を終え
鈴鹿越えでもしたのか大津から、
「無事参宮出来ました。？頃宇賀へ
帰るので、この旨を十三戸へ報らせ
て欲しい」という手紙が届いたので、
宮司（友華氏）は早速回覧板風のも

のを廻したらしく、それぞれの名の
下に印のついた文書もあるとか。ま
たそれには帰郷した際の土産物（煙
草やその他色々）等もくわしく載つ
ているそうである。十三人の中には
抜け参宮の者もいたらしいが、純粹
な信仰と共に生きていた昔の人の行
動として、やむにやまれぬものがあ
つたに違いない。天皇や貴族達が、
伊勢や熊野に詣でるのは、行列を連
ねたりしてある程度たやすいことで
あつたかも知れないが、庶民にとつ
てこれらは、精神的、肉体的、金銭
的には、明治といえども大仕事であ
つたと思う。この大きい夢を果たし
終えた喜びは言葉にすることも出来
なかつたかも知れない。そこで感謝
の気持を、この大絵馬に託さずには
いられなかつたのだろう。神に頼ら
ずには居られなかつたギリギリの願
いや、感謝の気持の充滿したこの神
楽殿に佇つてみると、それぞれの絵
馬からの語りかけが聞こえるようで、
このひとときが私は大好きなのであ
る。

奪われていた魂をとり戻し、やっ
と幣殿の石段を登つた。そこに見た
大きい二つの石注連柱には、神徳
輝字門「武威轟異境」と彫られて
ある。「日清戦争で日本が勝つたの

は神様のお蔭です」という意味だろ
うか。

正三位勲一等功二級伯爵、野津道貫
とある。野津道貫を調べてみると、
明治二十七年、日清戦争の時に、山
県有朋率いる第一軍の第五師団（広
島）の師団長として出兵をした陸軍
大将で、苦勞の末見事な戦果を挙げ
た軍人とある。その十年後の日露戦
争では第四軍の司令長官として出兵
している。ちなみにその時の第三軍
は乃木大将であつた。

幣殿の両側に面白い石燈籠を見つ
けた。左には猫の上に寿老人が乗り、
その上に火袋がある。右には犬の上
に福祿寿という珍しい石造物である。
元来、寿老人と福祿寿とは同一人物
であるという説もあるが、それはと
もかく、その杖頭の巻物には、人間
の寿命を司ることが書いてあるとい
うから、長生きを願う燈籠であるこ
とに間違いないらしい。

鈴を鳴らしてふと軒下を見上げる
と、中原八幡神社。古啓堂書」と
いう扁額が掲げてある。宇賀八幡が
何故「中原」なのかと疑問に思った。
後日、甲奴郡史宇賀編で調べてみた。
八幡神社御由緒調査書には、要約す
ると、

この村の名は昔、梶田村と言ひ、

当社は仁和年間、この村の八幡原
に鎮座し、近村の総氏神であつた。
年歴不詳であるが、世羅郡鶴荷村
と、甲奴郡梶田村とに分立した際
鶴荷。梶田。本郷。西野。吉舎。

安田等の農民の間で神社分離の争
論が激しく、暴状を極めた喧嘩が
続いた。この時鶴荷村の中原の甚
八という者が、夜中密かに御神体、
額面一個、豊磐間戸神、櫛磐間戸
神の二柱の木像を持ち帰り、背戸
の柿の大木の洞穴の中に隠して祭
つていたという。数年して事が治
まつた時点で発表して以来「中原
八幡宮」と唱えるようになった。
故に神職の信野家代々、甚八の子
孫も、この旨を言い嗣ぎ伝えてき
た。維新以後は「宇賀八幡神社」
と称するようになった。

とあつて、けれど昔にはありそう
な話で、とても面白く読んだ。

「つい先達つて、甲奴の奥の古い
墓地で、はからずも古啓堂の墓を見
つけました」とは信野先生の言。当
時、著名な書道家であつたか、それ
とも絵師であつたかは知る術もない
が、ともかく芸術家ではあつたのだ
らう。

この宇賀八幡神社の創建は、古伝
によると平安時代の初期末、仁和年

間(八八五)で、始めて八幡原(現在の大仙)に勧請し、その後建武二年(一一三五)茶臼山に移祀され、明応二年(一四九三)に現在の地に移祀されたそうである。

祭神は勿論、息長帯比売命(神功皇后)、品陀和気命(応神天皇)で、相殿に勧請してある神々は十八柱で、その最後に蘇民将来の名があつて一瞬以外に思ったが、調べていくうちに領けた。伝説によると、この地方方に素戔鳴尊が居られた時、蘇民将来と習合して疫病を免れさせた話があつたから。

明治四年の合祀令によつて宇賀八幡に合祀された小祠はなんと七十八社に及び、それらを相殿に鎮祭したとある。その後合併を解除されたもの。元の場所に返還を申し出たもの。台風や雨露によつて原形を無くしたものがあつたらしく、現在、境内地に見る限りでは幣殿の西側に大荒神社と大仙社と竜王社だけであるが、祠はなくても御神体は本殿と一緒に鎮座していられるものもあるかも知れない。

大荒神社の祭神は素戔鳴尊で、上野山城主の鎮守であつたのを、寛政元年(一七八九)にこの八幡に移祀されたという。元の故地附近の地名

を荒神平と呼んでいる。この荒神さんには随分昔から荒神神楽(五行祭)が舞われていて近在ではなかなか有名である。

大仙社の祭神は大山津見神で、創祀の年歴は不明であるが、八幡原から明治四年の合祀令によつて現在の社地に遷祀。現在も一般に大仙様と称えられ、牛馬保護の神様として慕われているらしい。

竜王社の祭神は、高籠神を始めとして五柱の神々であり創祀の年歴は不詳。矢張り合祀令の明治四年四月にここに遷祀されている。

高籠神は、神話によると、イザナミの死後イザナギの剣から滴った血から生まれた神で、京都の貴船神社はこの神を祭神としている所から見ると、水を操るのが得意な竜神さまであろう。雨乞い。止雨。田の水等を祈るには農家の大切な神様と言える。

宮司信野家の家系図を見ると、初代は尾張左衛門尉宗春で熱田神宮に奉仕していた時、平城天皇の御脳平癒を神宮に祈請して効があり三位中将に任ぜられたとある。嵯峨天皇の宣下により、備後国社家の統領となつている。

二代目は宗春の長子で、注連頭職

をつぎ、八幡原八幡宮を奉祭している。従四位信濃之祐宗清とあって、ここにしなのの文字が出て来ている。以来現在四十七代まで続いているが、四十五代正七位信野友幸氏は、知事

や天皇から何度も表彰を受け、境内にある顕彰碑には、くわしくその業績を賞めた、えてある。東谷の信野家の庭に建てられてある、信野家一千一十年記念碑(縦一・四五メートル、横〇・九二メートル、厚さ〇・二五メートル)にはまだお目にかゝっていないが凄いい。

宇賀の地名については色々の説がある。寛延三年(一七五〇)上野山城主矢田新助元俊の祖である平実家が鶴の羽の矢を負うて入城したからそれを村名にした。又の説には、その当時、一羽の鳩が鶴の羽根をくわえて来て天主閣に置き去つたからそれを村名にした。とあるが、それより以前の五文書にすでに宇賀の文字が出ていると立證されている。私めの貧しい想像では、祭神の「宇が之御魂神」から発したものでないかしらと思つている。

やつとこれだけの事を調べてみて、自分自身の時間と、正しいと思われ想像力がもつとあれば、文字(資料)は探せばまだまだあるだろうに

探訪、棲真寺と定ヶ原

小島 袈裟春

と少し残念に思つている。

棲真寺への表参道、本郷町の船木地区から寺に到る約四五米の谷道は、途中に落差約三十米、花崗岩の大岩壁を一気に落下する瀑雪の滝を始め、一屋岩、石室泉等の景勝があるとは云え、山腹を這い登り溪流を歩き又丸木橋を渡る仲々の悪路でもあつた。御案内の講師、末森先生がバスの中で「昨夜は雨の音が耳について、一晩中眠れませんでした」と、つい本音をこぼされたのを、我々は「何時もの冗談」と、軽く笑いで受流したが、これは「知らぬが仏」の臂への通りで、何ん共気楽な事であつた。老若男女五十人以上の団体で、もし昨夜の雨が止まなかつたら……と末森先生の御心中察して余りあるものであろう。

幸い雨は夜明前に止み、屋近くからは日も差して絶好の日和となつたのは、棲真寺大悲千手観世音菩薩の御利生か、真摯な歴史探究の一心が天に通じたのか誠に有難き展開ではあつた。

但し私しの事を云へばバスに酔つて

気分は最低、背中の冷汗を家内に拭き出してもいい、谷歩るきでは吹き出る熱汗で下着はぐっしり、寺に着いて第一にした事は下着の交換で何ん共締らない話であるが家内が居た事はこれ又幸いでもある。

さて参道の終点で何故か頑丈な鉄の階段を登り切ると、急に視界が開けて良く手入された広場がいくつか並び真直ぐ突切って石段を登ると、正面の、みすばらしい、萱葺き屋根をトタン板で包んだ小堂と、右側の池を、渡り廊下で結んだ、これも粗末な庫裏らしい建物、右の外れに物置小屋、左の外れに収蔵庫らしい小屋とが並んでそれが棲真寺の全部なのであった。……小堂の前に立って辺りを見廻すと北は山を背に、右手も左手も頂上を削平された小尾根、その間はかなり広い平地が段差を持っていくつか続く、遠景の見通しはないが窪地で日当り良好、地下水豊富な別天地である。棲真寺記によると本堂の外に、開山白雲禪師惠暁の栗棘庵を始め小早川氏代々による堂塔院坊、八院が建立されたところがあるがその広さは十分ある。しかしその堂塔も一六〇〇年関ヶ原合戦の後、小早川一門が防長に去ると寺領を失って急速に寂れてしまった。

その後一六六二年頃、近江の仲芳禪師祖純が来住して、前記の「棲真寺記」を編纂し、建立の縁起を正すと共に、奥の院の天境峰等、付近の十一景勝を選んで詩を付し信仰の聖地として法燈を再興した、が享保十五年（一七三〇年）火災によって灰燼に帰し僅かの仏像と法具を残すのみとなり、後一七三〇年有志によって漸く建てたのが現在の観音堂との事である。現在この寺には檀家と云うものは一軒もなく維持管理は近郷有志の奉仕との事であるが、担当の僧侶は居られる、変わった経歴を御持ちの方で面白い御話を聞かせて下さった。但し常住ではないので事前の連絡が必要との事である。

前述の如く江戸期の火災の為仏像や寺宝は少ないが、御本尊の大悲千手観世音菩薩は御無事で、収蔵庫内には阿弥陀如来像や千手観世音菩薩の眷族と云われる二十八部衆の内の十三体の木像等々が安置されて居る、二十八部衆像は具重文、像高四、五寸と小き目だが彫刻は精巧たち、梵天、帝釈天などバラモン教の神々で、猿面を翼を付けた迦楼羅王はその特異な姿が面白く、如何にも異国の神と云う感じで、何れもじっくりと拝観したい逸品ばかりであった。

唯雪舟作と云われる池は中央に逢来島を浮べて趣きがあるが渡り廊下に隠されて表から見えないのが残念ではある。

さて私しが棲真寺に興味を持ったのは、数年前今日の講師の末森先生からチラリと承った御話し、即ち「棲真寺記」の一節が妙に胸を打ったからである。源頼朝の側室が女兒を生んだ、頼朝側近の土肥実平はその女兒（名前は不明）を息子遠平の嫁に迎えたのだが、頼朝の正室政子の追求を恐れ、母娘共々、領国の沼田荘に移した。しかし一二一六年嫁が病死したのでその三年後、実平がこの嫁の追善供養の為に棲真寺を建立した。……

妻木姫と称したと云う、所が棲真寺の棲の字は妻と木の合成であろうから、考え方としては娘の死後十三年目に入定したと伝える妻木姫のため建立とも考えられる、又は後世の人が寺の名称を分解して妻木姫と云ったとも思われる、更に又、先の天窓妙仏大禪尼は、小早川家系図では遠平の妹となつて居るから、その方の菩提とも思えるのである。

何れにしても棲真寺の建立には寺伝と少し異つて、女性二人又は三人が主役の様であるが問題はその当時、土肥遠平が何処に居住して居たか、が鍵を握る、何故なら遠平の死没地は今も定かではないのである。

実平の系統で確実に沼田荘に居住したのは四代の茂平で小早川を称し高山城築城、海賊鎮庄令、巨真山寺念仏堂建立等々の文書で証拠があるが、その前の三代には一時的に来た事は想像出来ても確実な文書がない。

初代？実平は頼朝側近の武將で、出征以外に鎌倉を離れる事は出来なかつたと思うし、子の遠平は建仁二年（一一二〇年）地頭職となつたが、すぐ景平に譲り景平は又四年後、子の茂平に譲つて居るので、遠平、景平共この時来住はしないと云う。だがこの七年後の建保元年（一一二一

三年)に起つた和田、北条方の合戦が問題である。
 遠平の長子惟平は和田方に付いて敗れ、その子等と共に刑死してしまつた。……親の遠平が無事で居られるであろうか。

頼朝の死後、梶原、比企、畠山、和田と続く北条家への反乱に執権、義時は、嚴罰で臨んだであろう、姉の政子も同意したのであろう、遠平の室が頼朝側室の娘としたら……。

私が思うに、多分土肥の本領は没収され、小早川の家督は源義光の孫平賀義信の五男、二郎景平を養子に取つて譲らせ景平は人質同様鎌倉に留め孫の茂平を遠平達の監視役を兼ねさせ共に沼田荘に下らせたのであろう。

一二二一年の承久の乱において茂平は幕府方として働く以外選択はなかつたのである。

遠平達は多分定ヶ原か棲真寺の辺りに置かれたのであろう。定ヶ原は昔長ヶ原とも云つたとある。意味深長な伝承である。定は又庁とも転化する、棲真寺建立と遠平の名の出ない事も頷けるし又棲真寺奥の院天境峰の墓石群も土肥系の人達と関係があるかも知れない。……実は私は調べざる事があつて、バス探訪の後でも

う一度定ヶ原に行つたが、そこで面白い話しを聞いた、それは松浦景正と云う武將の事で彼は一行の監視兼護衛役として鎌倉から来ていたが、主人公達の死去後は武士を捨て、帰農しその人達の供養をし墓を建て代々怠らず続けて居ると云う、現在定ヶ原に住む松浦家はその子孫である、私は当の御本人から聞く事が出来たのである。

さてその定ヶ原の石塔について、末森先生編纂の資料に規模雄大、美術的であつたが私はそれに優美華麗と続け度い、それは格狭間の作り方や蓮花の彫刻その下段の反花座等はまだ関西式と云われる普通の作りだがその下の段四面に各三個づつ蓮花の彫刻がある事で、私には、珍らしく全体と調和して優美華麗に見えるのである。実はバス探訪の時はそれに気付かず、後で調べて判明、さすが女性の墓と感動し同時に墓を作つた関係者の思い入れをもゆかしく惚んだのであつた。

唯説明板に書いてあつた鎌倉時代の様式と丈では具体的でなく、多分笠石の隅飾りの形とか伏鉢の大きさを云うと考へたので、比較の為、実は米山寺の小早川墓を再見した。そこには鎌倉末期念心作(一三一九年)

と判明して居る宝篋印塔始め鎌倉期と思われる塔が並んで居る、でも隅飾、伏鉢共余り参考にならず、私の目を引いたのは基壇の作り方であつた。

所がバス探訪の時頂いた大和町の觀光パンプを見て居たら同町安国寺の室町以後とある宝篋印塔の反花座の下の台に三個づつ並ぶ蓮花の彫刻があつた、もしこれが当地方の特色とする定ヶ原石塔は一寸時代が下がる事となる……。それに基壇の切石積や平石敷は小早川墓地の一三七八

年南北朝後期に死亡した貞平以下の墓基壇と同様の作り方で、鎌倉期と云うのは微妙だが、まあ蓮花座以下は後世の補作と考へられない事もない。又墓の主は遠平の室と大日本史料に伝わる伊東祐親の娘か、妹又は室と伝わる妙仏かその母妻木姫か各論がある様だが、私はその結論は出ないほうが良いと思う。
 さて土肥本流はどうなつたであろうか……。これに付いて三月七日バス探訪の時、御説明下さつた大和町の史家、松井先生がああ椋梨の堀城跡で話された事、即ち「土肥夷平の系統は三代を以つて断絶しました」との言葉がある。又「子孫達は皆、我等は氏は平氏、血は源氏と称して

居ます」とも云われた。私はその詳細が知り度くて先生が帰りの車に乗る直前やつと質問の機会を得たが急ぐ先生は系図を見せてくれて「小早川も土肥もです」とのみで多くを語る暇はなかつた、私はその系図がのどから手が出る程欲しかつたのだが……。 (一九九三年三月)

中島政子作

大和町の歴史を訪ねて(三月七日)

海棠や法話聴く間の通り雨
 白梅や登る往時の石畳
 観音の在す芽木山雨煙る
 うららかなや瀑雪の滝ほとばしる
 芽木山を臨みて生まる飛行場
 新飛行場臨みし山の風光る
 初蝶や千手観音まぶしめり
 沈丁に観音山の風冷ゆる
 鳥雲や塔に眠れる妻木姫
 滄翠西風石の積まるる古墳群
 蛇穴を出づ本丸を守る空壕に
 かたむきしまゝの碑犬ふぐり
 啓蟄の土蹴散らかす放ち鶏
 山口県八雲の鶴(一月三十一日)
 雲うごき田鶴の動きて春近し
 凍鶴に八代の雲のかがやけり
 数道に鶴の抜け羽や凍ゆるむ
 二羽三羽寄りて鶴翔つ春隣
 斑雪野に鶴首立てて鳴き合へり

棲 真 寺

岡本 貞子

夜来の雨に空を見上げ乍ら、朝七時半に家を出る。鎌倉時代のロマンに夢を馳せ乍らバスで二時間、そのうち空は次第に晴れて風は少し冷たいが、絶好の探訪日和になった。

やがて山路を分け入る程にすばらしい展開が始まる。何百年も生き続けている大木と、細い参道に敷かれた古い石畳は、その幾星霜を如実に示すように、陥没したり、磨減ったりして、今それを踏んで登る足裏が古代に繋がっているような充足を感じる。なお進む前方に昨夜の雨が瀑雨を一そう音高く、鮮やかに演出している。思わず一せいに挙がる喚声、又その声が山谷に飜してどの顔もほころんでいる。清流も川底の岩の上をさ走っている。せゝらぎに架けてある九木橋が真新しいのは、われわれの為に村の方がわざわざ整えて下さった由、疲れた足も軽くなる思い。

山野の自然の中で受ける人情は、何と言う暖かさやさしきで響いて来るものであろうか。

今から七百七十年余り前創建の棲

真寺は、周辺に多くの院坊を含む大迦藍だったが、度重なる火災と時代の流れの中で今は、雪舟作と言われる池を中心に左に観音堂、宝庫、右に庫裡のある佇まい、野鳥囀る鄙びた草庵だった。宝庫の古い位牌、仏像の世代を越えた端正さに驚歎する。雪舟作と言われる簡潔な池に、趣きのある太鼓橋風の渡り廊下が架けてあり、材は松だと伺ったけれどその姿は限りなく優美で質朴であった。お坊様の説話も、停年退職後坊守になられた方にふさわしく、抹香臭のない魅力的な方だった。

古代の創建から世の変遷を重ねた今、この堂宇に佇んで、幾世代も前の自分が置き換えられて立っている様なタイムスリップの一瞬だった。それは山上から眺める梅春の風景によつて触発された幻かも知れない。

定ヶ原の母の思い。堀城跡。振鞘古戦場の跡。各々の置かれた立場で最後の處理と行動の跡なのだ。

三月例会 大和町の史跡を巡って

後藤 匡史

末森の小早川か、小早川の末森かと、今年最初の三月例会は、恒例になった末森氏の担当である。

賀茂郡大和町椋梨小早川周辺。三原市から、いつも仕事がら通る本郷町舟木にある毛利元就も見たと云う高さ三十メートルの瀑雪の滝。

そして、そこから山越して応海山棲真寺、ここでは、源頼朝ゆかりの妻木姫が着用したと云われる襦袢に魅せられて、又、境内に散在する古墓等。

そして椋梨小早川氏居城の堀城跡。大和町史跡巡り、つづり方狂教室

○熊谷の叔母ちゃんが瀑雪の滝から山越して棲真寺の途中、汗かいたと、それや私のサイフの中味厚(熱)かった。

○廣保のお母さんと佐藤さんの会話 広島にも色々史跡があるわねえと

それでは、その史跡を広島(披露しま)す。私しゃ身体が広島(疲)勞します)

○佐藤のきんちゃん末森さんが山城調査して、これも土壘、あれも土壘と、そして二人は土壘(同類)子

○椋梨で買物して、
お大和(お代)はいくら
○そこで一句
し後藤氏(仕事仕)が
通りすがりの名勝地
いつも水(見ず)して
瀑雪の滝

大和町棲真寺を訪ねて

赤松 雅子

ねこ柳川原にゆれて
春浅き沼田川の
せゝらぎの音きながら
源流に向つて逆登る
丸木橋 瀑雪の滝
石室泉 馬酔木の花
いにしへの幼なき姫の生涯は
あまりにもかわいそう
母の愛に静かに眠れ
心をこめて手を合わす
大和町は心のふる里
いきぎよく生きる僧と
心やさしき人々の町
海堂のつばみふくらみ
春を待つ

平成五年三月七日記

福山市教育委員会後援

第十一回親と子の古墳巡り

参加者募集要項

〔目的〕親と子の古墳を中心とした古代文化との触れ合いを通して、子供に歴史に対する関心を抱かせると共に、古墳等の文化財に対する知識と正しい取り扱い等を学び、併せて郷土に対する認識を広めさすことを目的とする。

〔日時〕

平成五年五月五日(子供の日) ※小雨決行・雨天の場合は五月九日に順延

◎午前八時三〇分福山駅南口約人像前集合(現地参加の場合は九時三〇分津之郷小学校校門前集合です)

◎午後四時福山駅解散予定

〔見学場所〕福山市津之郷町・赤坂町周辺の古墳(本谷一号古墳・坂部四号古墳・すべり石古墳・いこうか山古墳等)

〔参加費〕

大人(中学生以上)三百円 子供二百円 ☆資料代保険代実費 ※交通費は、自己負担です。

〔参加申込〕往復はがきに参加希望

者名と各自の年齢、住所、電話番号、参加者同士の関係(小学生の場合は学年)を明記のうえ、四月三〇日(必着)までに事務局まで申し込みのこと。

但し、先着順に百名程度になり次第締め切ります。

〔参加資格〕約五キロメートルの行程を歩行可能な方、但し、小学六年生以下の児童については保護者の付き添いが必要です。

〔その他〕弁当・飲み物持参、山歩きできる服装を着用して下さい。

郷土史講座

日時	講座名	講師
5/22	古墳の編年	網本善光
6/27	備南の弥生遺跡	七森義人

①会場は何れも福山市花園町福山市中央公民館会議室です。

②時間は何れも午後一時三〇分開講、同三時三〇分終了予定です。

③聴講無料で誰でも自由に参加できます。

④講座によっては資料代百円程度徴収する場合があります。

今後の行事予定

六月十三日バス例会「美星町の史跡巡り」講師神谷和孝・田口義之

八月(日時未定)座談会「阿部正弘」

☆阿部正弘についての意見発表者を募集します。希望者は事務局までお申し出下さい。

事務局日誌

二月二十日(日) 第八回郷土史入門講座「最近の発掘調査から」講師篠原芳秀(参加四〇名)、終了

後平成四年度忘年会・於福山ワシントンホテル(参加四五名)

平成五年(一九九三)

一月一日事務局会議・於中央公民館(五名出席)

同月一六日役員会・於ホーセン(十一名出席)

同月二四日平成五年度総会・記念講演会「生涯教育と故郷学習」村上正名先生・於福山城湯殿(七一名出席) 終了後新年会(五四名出席)

二月二一日事務局会議・於中央公民館(五名出席)

三月七日(日) 三月例会「大和町の史跡巡り(バス)」講師末森清司(参加五二名)

三月二一日(日) 木之上遺跡探訪の集い(共催)講師田口義之・出内博都(参加一五〇名)

同月二七日第一回郷土史講座・於中央公民館「備後宮一族の興亡」講師田口義之(四七名出席)

四月四日(日) 四月例会「甲奴町の

一筋の路

藤代 由子

終りなき歴史探訪の道

流れ去る年月

振り返り見る長い道のり

一途の光を求めて人生の

一ページをすこす

出逢があり別れがあり一こま君にはげまされ貴女に支えられ

手取り足取りの年月感謝して

いつまで続くか夢をロマンを生きるあかしとするしにあるこう

史跡巡り(バス) 講師藤原一三 熊谷操子(五〇名出席)

会計より

平成五年度会費をまだ納入されていない方、早めにご納入ください。四月末までに納入されない場合は脱会されたものと見なします。

備陽史探訪の会

事務局

〒720 福山市多治米町

五一一九一八

☎(0849) 53916157